

# ダニエルの書 - 第百六十六号

予言を解き明かす：フランス革命、プーチンのロシア、そしてウクライナ紛争

Jeff Pippenger

2024-03-29

1989年における終わりの時の類型化を第10節の予言的歴史によって考察し始めるにあたっては、地の獣の両方の角の第三世代の歴史に立ち戻る必要がある。1913年には、地の獣の共和主義の角がグローバリストの銀行制度と妥協する世代に入り、1919年には、真のプロテスタンティズムの角が、自らの教育制度の認定を世界に明け渡したことにより、背教的プロテスタンティズムの神学者たちおよびアメリカ医師会と妥協する世代に入った。両方の角は、その時点以降、それぞれのメッセージの方向性を変化させることになる世界との妥協的な関係を開始した。

その歴史の中で、終末の「北の王」と「南の王」の出発点もまた転換点を迎えた。ファティマの奇跡は1917年10月13日、ポルトガルのファティマで起こった。それは、若い羊飼いの子ども3人、ルシア・ドス・サントスとそのいとこのフランシスコ・マルト、ジャシント・マルトが目撃した一連の聖母出現の集大成であった。子どもたちの証言によれば、ファティマの聖母と呼ばれる聖母マリアが、1917年5月から10月まで毎月13日に彼らの前に現れた。

1917年10月13日の最後の出現の際、数万人の人々がファティマ近郊のコヴァ・ダ・イリアに集まり、子どもたちが予告した奇跡を目撃しようと期待していた。目撃者たちによれば、太陽は色を変え、回転し、空で踊っているように見えた。この出来事は「太陽の奇跡」または「ファティマの奇跡」として知られるようになった。

ファティマの奇跡は、カトリックの歴史と信心において重要な出来事であり、長年にわたり多くの研究、議論、宗教的解釈の対象となってきた。ファティマでの出来事は、民衆信心、聖母マリアへの崇敬、そしてカトリック教会内における終末論的テーマの解釈に、永続的な影響を及ぼしてきた。

ボリシェヴィキ革命は1917年11月7日、ウラジーミル・レーニンとボリシェヴィキ党に率いられたボリシェヴィキ勢力が、ペトログラード（現在のサンクトペテルブルク）で主要な政府庁舎やインフラを掌握したときに、ロシアで起こった。この出来事は、同年初めの二月革命に始まり、皇帝ニコライ2世の退位と臨時政府の樹立へとつながった1917年のロシア革命の頂点となった。

革命のさなか、ボリシェヴィキは臨時政府を打倒することに成功し、ロシアにおけるソビエト権力を打ち立てた。ボリシェヴィキは社会主義国家の樹立を宣言し、産業の国有化、土地の再分配、そして第一次世界大戦からのロシアの離脱を含む自らの革命的綱領の実行に着手した。十月革命は最終的にソビエト連邦の成立へとつながり、ロシアと世界に深く広範な影響を及ぼして20世紀の歴史の進路を形作った。

イエスは初めによって終わりを示す。終わりの日の北の王と南の王を十分に見極めるためには、その始まりを理解する必要がある。ダニエル書11章で特定されている文字どおりの南の王と北の王は、南の王はエジプトの文字どおりの領域を支配する勢力、北の王はバビロンに関連する文字どおりの地理的領域を支配する勢力として定義されている。

文字どおりの預言は、十字架の時代に霊的預言へと移行した。そのとき、古代の文字どおりのイスラエルは、現代の霊的イスラエルへと移行しつつあった。文字どおりの異教ローマは、西暦67年から70年に至るまで、文字どおりの三年半のあいだ文字どおりのエルサレムを踏みにじり、霊的教皇制ローマは、霊的な三年半のあいだ霊的エルサレムを踏みにじった。

霊的バビロンは、ヨハネの黙示録17章において、地の王たちと姦淫する大淫婦として特定されている。霊的エジプトは、黙示録11章において無神論的フランスとして特定されている。1798年の終わりの時に致命的な傷を受け、1989年の終わりの時に霊的南の王の現代的顕現に報復した霊的北の王の現代的顕現と、その霊的南の王の現代的顕現は、いずれもダニエル書11章40節に表されている。両勢力の終末時代における姿の起源は1917年から1918年の時期にあり、これは地の獣の二つの角にとっての妥協の世代と同じ時期である。その始まりを認識してこそ、終わりを正しく適用できる。終末時代の北の王と南の王の始まりはいずれもフランス革命に端を発する。

16世紀、宗教改革は、人々に開かれた聖書を掲げて、ヨーロッパのあらゆる国への受け入れを求めた。いくつかの国々は、それを天からの使者として喜んで迎えた。別の国では、教皇制がその受け入れを大いに阻止することに成功し、高める働きを伴う聖書の知識の光は、ほとんど完全に締め出された。ある国では、光は入り込んだものの、闇はそれを悟らなかつた。何世紀にもわたり、真理と誤りが主導権をめぐって争った。ついに悪が勝利し、天の真理は追い出された。「さばきはこれである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛したのである。」ヨハネ 3:19。その国は、自ら選んだ道の結果を刈り取るままに任された。その恵みの賜物を侮った民からは、神の霊の抑制が取り去られた。悪は成熟するに任され、そして全世界は、光を故意に拒んだことの実を目の当たりにした。

フランスで幾世紀にもわたって推し進められてきた聖書に対する戦いは、革命のただ中で頂点に達した。あの恐るべき事態は、ローマによる聖書の抑圧の当然の帰結にすぎなかつた。それは、教皇政策がどのような帰結を生むかを、世界がかつて目撃した中で最も鮮烈に示す事例となった。すなわち、千年以上にわたりローマ教会の教えがその方向へと傾いてきた結果の実例である。

「教皇権至上の時代における聖書の抑圧は、預言者たちによって預言されていた。さらに、黙示者は、特にフランスにおいて『罪の人』の支配から生じるはずの恐るべき結果をも指し示している。」『大論争』265、266頁。

フランス革命は、「教皇権至上の期間」における聖書の抑圧によって生み出された。やがて教皇権の最大の敵対者となるべき無神論の誕生は、教皇権それ自体によってもたらされたのである。フランス革命は1789年から1799年にかけて起こったが、フランスに始まった無神論的革命精神は、その後もヨーロッパ全域、さらにその外へと広がり続けた。フラ

ンスにおける革命の終結から百十八年後、ロシア革命がロシアで始まった。フランスに始まった無神論の革命はロシアにおいて終結し、1917年、ロシアはエジプトの無神論によって象徴される国民の預言的代表となった。南の王として表される竜の勢力は、フランスからロシアへと移っていた。

フランスの革命は、政治的にも予言的にもナポレオン・ボナパルトによって体現され、その意味で、ナポレオンはエジプトの無神論によってもたらされた革命によって樹立された国家の最初の指導者に当たる。ナポレオンの自己愛は、プーチンの自己愛によってふさわしく繰り返されている。

ナポレオンは、イメージとプロパガンダの力を鋭く認識していた。元KGB職員であるプーチンも同様だ。KGBはプロパガンダを専門としている。ナポレオンは、自らの権威や権力、そして指導者としてのイメージを公衆に打ち出す手段として、肖像画を用いた。彼は当時最も名高い画家たちに肖像画を発注し、その中にはジャック＝ルイ・ダヴィッド、アントワーヌ＝ジャン・グロ、ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングルらがいた。

これらの肖像画は、公式の国家肖像画からより非公式でくだけた場面に至るまで、さまざまなポーズや場面でナポレオンを描いた。それらは、ナポレオン自身の個人的な記念品であっただけでなく、彼のイメージと影響力を国内外に広めるための手段としても機能した。プーチンもまた、インターネット上の現代のどのインフルエンサーにも匹敵するような場面で撮られた自身の写真を多数用いて、自らのためにまったく同様のことを成し遂げている。

フランス革命の初期に、国王とその家族および家臣は打倒され、処刑された。ロシア革命の初期に、皇帝とその家族および家臣は打倒され、処刑された。フランスで始まった革命はロシアで帰結した。フランス革命は黙示録第十一章の預言の主題であり、したがってフランス革命は預言解釈の規則に従う。イエスは常に、物事の終わりをその始まりで示すので、ロシア革命はフランス革命の終わりである。

ウラジーミル・プーチンは、エジプトにおける無神論によってもたらされた革命で成立した国家の最後の指導者を象徴している。

ロシアの初代指導者はウラジーミル・レーニンだった。「Vladimir」という名前はスラブ語起源で、「vlad」と「mir」という二つの要素から成る。「vlad」はスラブ語の語根「vladeti」に由来し、「支配する」または「権力を行使する」ことを意味する。「mir」は「世界」を意味する。最初のウラジーミル（レーニン）は最後のウラジーミル（プーチン）を象徴しており、彼はまた無神論の革命の初代指導者（ナポレオン）によっても象徴されている。

1814年4月、第六次対仏大同盟戦争で敗北し、フォンテーヌブロー条約を経て、ナポレオンはフランス皇帝を退位し、地中海のエルバ島へと追放された。彼は同島の主権を与えられ、権限は大幅に縮小されたものの、皇帝の称号を保持することを許された。ナポレオンはエルバ島で約10か月を過ごし、その間にフランスでの復権を計画した。エルバ島を脱出し、百日天下のあいだ短期間フランスで権力を取り戻したのち、1815年6月のワーテルローの戦いで決定的に敗北した。この敗北ののち、連合軍、特にイギリスは、ナポレオンがこれ以上の騒乱を引き起こすことを断固として防ごうとした。その結果、彼は再び追放さ

れ、今度は南大西洋の僻遠の地であるセントヘレナ島に送られた。ナポレオンは1821年に死去するまで、セントヘレナ島での流刑の身として生涯の残りを過ごした。

プーチンはKGB古参派の代表的人物である。KGBは、1954年から1991年の解体まで、ソ連の主要な治安機関兼情報機関であった。国内外における内部治安、対諜報、情報収集を担っていた。KGBは、広範なスパイ網や監視活動、そして共産政権が国民統制を維持するうえで果たした役割で知られていた。ウラジーミル・プーチンは、ソ連の主要な治安・情報機関である国家保安委員会（KGB）の一員だった。

プーチンはレニングラード州立大学を卒業後の1975年にKGBに入った。彼は1991年のソ連崩壊までKGBで働き、その後政界に入り、最終的に2000年にロシアの大統領となった。KGBでの経歴は、統治や外交政策に対する彼の姿勢に大きな影響を与えている。ナポレオンが最初に流されたエルバ島は、KGBの理念が戻ってきた2000年までの1991年からの歴史を象徴している。やがてプーチンが敗北するときは、第13～15節で示されているように、その二度目の敗北（最初は1989年）は、ワーテルローと、ナポレオンが死んだ第二の流刑によって象徴される。

1798年と1799年に、ナポレオンは教皇権に致命傷を負わせた。1799年にはフランスでフランス革命が終結したが、1917年までにはロシアにも及び、ボリシェヴィキ革命となった。1917年にはポルトガルでファティマの奇跡が起こり、マリアとヨセフと話をしたとされる3人の子どもに3つの秘密のメッセージが与えられた。その3つのメッセージは、教皇、すなわち北の王だけが読むことを許されているという意味で秘密であった。これらのメッセージは、教皇に対し、カトリック教会の指導者たちと特別会議を召集し、前年に共産主義ロシアとなったばかりのロシアを聖母マリアに奉獻するための特別な式典を執り行うよう指示した。

そのメッセージには、教皇がロシアをマリアに奉獻するよう求める命令を実行しなければ、世界は再び世界大戦に見舞われる、という警告が含まれていた（奇跡の翌月に第一次世界大戦は終結することになっていた）。ファティマのメッセージは、保守的カトリックによる預言解釈の枠組みとなった。そこでは、教皇ヨハネ・パウロ2世と第1バチカン公会議に代表される保守的カトリックと、現在の「ウオーク・ポープ」と第2バチカン公会議に代表されるリベラル・カトリックとの間にある、カトリック教会内部の闘争が浮き彫りにされた。

ファティマのメッセージでは、「善い教皇」は「白い教皇」であり、「悪い教皇」は「黒い教皇」だった。善い教皇であるヨハネ・パウロ2世は、ファティマの聖母を自らの導きの偶像と見なした保守的な教皇であり、悪い教皇はウオーク教皇で、いわゆる聖母マリアからのあらゆるメッセージも拒絶している。ポルトガルのファティマにある聖地を訪れると、敷地の入口は、片側に黒い教皇、もう片側に白い教皇の巨大な像が立ち、その間に設けられている。こうして、ファティマの予言で示された内的な闘争が象徴されている。

ファティマの三つの秘密のメッセージのもう一つの要素は、カトリック（北の王）と無神論（南の王）との戦いを強調していたことである。カトリックと無神論的ロシアの戦いが、カトリックのかなりの部分を方向づけているサタンの予言の主題であることを認

識しなければ、第二次世界大戦中にカトリック教会がナチス・ドイツに与えた支援を理解するのは、不可能とまでは言わないにしても困難である。

第二次世界大戦中の1941年9月8日から1944年1月27日まで続いたレニングラード包囲戦は、歴史上最も長く、最も苛烈な包囲戦の一つであった。1942年8月23日から1943年2月2日にかけて行われたスターリングラードの戦いは、第二次世界大戦における最も流血を伴い、最も重要な戦いとしばしば見なされている。この戦いでは双方に甚大な損害が生じ、戦死者、負傷者、捕虜を含めた総損害は200万人を超えると推定されている。スターリングラードの戦いはまた戦局の転換点ともなり、ドイツ軍に対するソ連の決定的な勝利をもたらし、最終的にはナチス・ドイツの敗北へとつながった。

ナチス・ドイツの対ロシア戦、特に先に挙げた二つの戦いを認識しなければ、カトリック教会の秘密の同盟者としてのドイツの役割を理解するのは難しい。ファティマの聖母マリアの悪魔的な予言に動機づけられたカトリックと、ロシアの無神論、ひいてはその後の共産主義ソ連との間に霊的戦争が存在したという前提を理解しなければ、第二次世界大戦後にカトリックがナチの戦犯を秘密裏に匿い、次いで世界各地へ移送したことの論理は見過ごされてしまう。ナチスは、ロシアとの闘いにおけるカトリックの代理軍だった。

この預言的な論理のもと、無神論的なロシアの指導者であるプーチンは、その指導者たちが公然とナチであることで知られるウクライナでの戦争に関与している。第二次世界大戦以降における無神論に対するファティマの戦いの地上部隊は、ファシズムとナチズムである。もちろん、ウクライナ政府の指導者たちに関するこの現実が十分に記録されているにもかかわらず、ヒトラーの国民啓蒙・宣伝省の現代版（主流メディア）は、これらの事実をできる限り覆い隠してきた。

「ウクライナ」という名称は、「辺境」または「端」を意味するスラブ語の「ukraina」に由来する。この語は歴史的には、現代のウクライナに先行する中世国家であるキエフ・ルーシの国境地帯を指し、ウクライナは東欧とユーラシアの十字路に位置している。歴史を通じて、そこはビザンツ帝国、オスマン帝国、ロシア帝国などを含むさまざまな文化・文明・帝国の出会いの場となってきた。その戦略的な位置により、文化・政治・軍事の面で重要な相互作用が生じる辺境地域となった。中世期には、ウクライナはキエフ・ルーシの辺境であり、キエフ・ルーシは現在のウクライナ、ロシア、ベラルーシの一部を包含する強大な国家であった。時代の推移に伴いキエフ・ルーシは拡大と縮小を繰り返して国境がたびたび変動し、ウクライナはその国家の周縁にとどまり続けた。

第10節に示されている1989年のソビエト連邦の崩壊後、第11節と第12節は、南の王が反撃して北の王に打ち勝つ戦いを描いている。その戦いはラフィアで行われ、そこは南の王と北の王の支配領域の境界であった。

紀元前217年に起こったラフィアの戦いという名称は、その戦闘が行われた場所の近くにあった町の名に由来する。ラフィアは、古代パレスチナの沿岸地域、すなわちエジプトのプトレマイオス朝王国とセレウコス朝帝国との国境付近に位置していた町であった。戦い当時、プトレマイオス4世フィロパトル王の統治するエジプトのプトレマイオス朝王国と、アンティオコス3世王の統治するセレウコス朝帝国との国境は、ラフィア周辺に置かれ

ていた。両陣営はレヴァントにおける戦略上重要な領土の支配権を確立しようとしていたため、この戦いはこの国境地帯の近くで行われた。

古代の町ラフィアは、現代の都市ラファの近くに位置している。ラファはガザ地区南部にある都市で、パレスチナ自治区に属している。紀元前217年にラフィアでプトレマイオスが勝利した後、彼はエルサレムのユダヤ人に対する迫害を始め、エジプトでもそれを行った。その勝利は長続きせず、いわば彼は続く三つの節でワートルローを迎えることになる。13節では、先に敗れた北の王が戻り、15節までに南の王を圧倒する。

ウクライナにおけるプーチンの勝利は、宣伝工作を専門としていた元KGB職員であるプーチンによって、おそらくウクライナ指導部のナチ的なルーツを暴露し、経済的利欲からその体制を支持した西側世界の者たちも暴き、さらにグローバリストが運用している、米国の納税者が資金提供してきた秘匿されたブラックサイトやバイオラボも、疑いなく明るみに出すために利用されるだろう。

それらの暴露は、世界のグローバリストたちの現在のお決まりの主張を打ち砕き、アメリカ合衆国の民主党系の論客たちのそれも打ち砕くだろう。そのプーチンにとっての勝利は、すなわち七人のうちの一人でもある八番目の大統領が、第16節の直前に歴史に登場する預言された独裁者としての役割を担うための正当性を与えることになるだろう。そして第16節とは、間もなく到来する日曜法である。

第13節では、北の王が軍勢を立て直し、第14節では、異教ローマが初めて歴史に登場するが、まだ北の王ではない。そこではそれが「幻を確立する」象徴として、また自らを高ぶらせてのちに倒れる権力として特定されている。ウクライナでの戦争におけるプーチンの勝利の後、教皇権は第16節の「日曜法」に先立って、世界政治の舞台で台頭し始めるだろう。

フランス革命とロシア革命との関係、ナポレオンとプーチン、ファティマの奇跡とその三つの秘密、バチカンとヒトラーの秘密同盟、そしてバチカンとレーガンの秘密同盟は、いずれも、2001年9月11日からアメリカ合衆国の日曜法に至るまでの期間を扱う11節から15節に描かれた歴史の中で交差する、預言的な「車輪」である。10節に入る前に、これらの預言的な「車輪」を簡単に要約しておくことが重要だった。

以下の記事は「NBCニュース」からのもので、これ以上ないほどの「メインストリーム・メディア」に属している。そして「MSM」は、ヒトラーの第二次世界大戦時の宣伝機構の現代版である。この記事はもちろん反プーチン、反ロシア、親ウクライナだが、それが要点ではない。天の御国の国民として、神の民はサタンの業のいずれの側も支持すべきではないし、すべての戦争はサタンの業である。

本稿の目的は、カトリック（北の王）と無神論（南の王）の間の預言的な戦い、そしてその二つの預言的勢力の戦いにおいてナチズムがカトリックの代理軍として用いられてきた（1989年にはアメリカ合衆国が用いられたのと同様に）という事実について不案内な人々が理解できるようにすることである。預言を学ぶ者は、第二次世界大戦と冷戦の背景史が現在のウクライナでの戦争に反映されていることを見て取れるだけの十分な証拠を持つ必要がある。というのも、それがダニエル書11章11節と12節の成就だからである。

預言の直接的な成就を示す歴史的出来事が人々に提示され、その預言は、この地球の歴史の終結へと至る出来事を象徴的に描き出したものと理解された。『セレクトッド・メッセージ』第2巻、102頁。

NBCニュース記事：「プーチンの『非ナチ化』という主張が正しくないとしても、ウクライナのナチ問題は現実である」

ロシアのウラジーミル・プーチン大統領が、ロシアによるウクライナへの侵攻を正当化するために作り出した数々の歪曲の中でも、おそらく最も奇妙なのは、その行動が同国とその指導部を「非ナチ化」するために取られたという彼の主張だ。隣国の領土に装甲戦車や戦闘機で踏み込むことを正当化するにあたり、プーチンは、この措置は「『いじめやジェノサイドにさらされてきた』人々を『守るため』に」講じられたものであり、ロシアは「ウクライナの非軍事化と非ナチ化」を目指すとして述べている。

ユダヤ人共同体の壊滅を含むプーチンの破壊的な行為は、彼が自分の目標は誰の福祉をも保障することだと言うのは嘘であることを明白にしている。

表面的に見ても、プーチンによる中傷は荒唐無稽だ。というのも、ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領はユダヤ系で、第二次世界大戦中に家族の一部が殺害されたと語っているからである。ウクライナで最近、大量虐殺や民族浄化が行われているという証拠もない。さらに、敵をナチスと呼ぶのはロシアではありふれた政治的な策であり、とりわけ、偽情報キャンペーンを好み、征服を正当化するために第二次世界大戦の宿敵への国民的復讐感情を煽ろうとする指導者によって多用される。

プーチンがプロパガンダを展開しているのは事実だが、ウクライナには過去と現在の双方において実際にナチス問題があることもまた事実だ。ユダヤ人共同体の荒廃を含むプーチンの破壊的な行為は、彼の目的が誰の福祉をも確保することにあるという主張が嘘であることを明らかにしている。しかし、クレムリンの残虐な侵略に対して青と黄の旗を守ることがいかに重要であっても、ウクライナの反ユダヤ主義の歴史やヒトラーのナチスとの協力、さらには今日なお一部で見られるネオナチ勢力の支持を否定するのは、危険な見落としだ。

なぜ避難しているウクライナ人はこんなに同情されるのか？彼らは白人だからだ。

第二次世界大戦の開戦前夜、ウクライナには欧州でも最大級のユダヤ人共同体があり、推計では最大で270万人に達していた。この地の反ユダヤ主義やポグロムの長い歴史を考えれば、驚くべき数字である。戦争の終わりまでに、そのうち半数以上が命を落とすことになる。1941年にドイツ軍がキーウを掌握したとき、彼らは「ハイル・ヒトラー」と書かれた横断幕で迎えられた。ほどなくして、約3万4千人のユダヤ人が「ロマやその他の「望ましくない者たち」とともに「移住の名目で一斉に拘束され、市外の野原へ連行され、そこで虐殺された。これは後に「銃弾によるホロコースト」として知られるようになった。

バビ・ヤール溪谷は、2年間にわたり集団墓地として埋め尽くされていった。そこで殺害された人数は最大で10万人にのぼり、アウシュヴィッツや他の絶滅収容所以外では、ホロコーストにおける単一の虐殺現場として最大級の一つとなった。研究者たちは、同地でのナチスの殺害命令の遂行に地元住民が果たした重要な役割を指摘している

現在、ウクライナには5万6千人から14万人のユダヤ人がいると推定されており、彼らは祖父母の世代が想像もしなかった自由と保護を享受している。そこには、先月成立した、反ユダヤ主義的行為を犯罪化する改正法も含まれる。残念ながら、この法律は、シナゴグやユダヤ人の記念碑に鉤十字が描かれる破壊行為や、キーウや他の都市で武装親衛隊を称賛する不気味な行進など、公然たる偏見の顕著な増加に対処することを目的としていた。

別の不穏な動きとして、ウクライナは近年、ナチスの手先としての疑いのようなない経歴によって名声に汚点のあるウクライナ民族主義者を称える像を乱立させてきた。フォワード紙は、こうした忌まわしい人物の一部を一覧にし、ウクライナ民族主義者組織（OUN）の指導者ステパン・バンデラも含めた。彼の追隨者たちは、SSやドイツ軍のための現地民兵として活動していた。「ウクライナには、このナチス協力者を賛美する記念碑が数十基あり、通り名も数十にのぼり、別々のウィキペディアのページが二つ必要になるほどだ」とフォワード紙は記している。

もう一人しばしば顕彰されるのがロマン・シュヘヴィチで、ウクライナの自由の闘士として崇敬されている一方、恐れられたナチスの補助警察部隊の指導者でもあった。その部隊については、Forwardが「数千人のユダヤ人および…ポーランド人の虐殺に責任がある」と指摘している。さらに、OUNの一時議長で「私はウクライナにおけるユダヤ人の殲滅を主張する」と書いたヤロスラフ・ステツコの像も建てられている。

過去10年の間に、極右勢力もまた政治的な影響力を増しており、中でもスヴォボダ（旧ウクライナ社会民族党）ほど身の毛のよだつ存在はない。同党の指導者は、同国が「モスクワ系ユダヤ・マフィア」に支配されていると主張し、その副代表はウクライナ生まれのユダヤ人女優ミラ・クニスを形容するのに反ユダヤ的な蔑称を用いた。スヴォボダは複数の議員をウクライナ議会に送り込み、その中にはホロコーストを人類史における「明るい時期」と呼んだ者もいる、とフォーリン・ポリシー誌は伝えている。

同じくらい深刻なのは、ウクライナで増えつつある志願兵大隊のいくつかにネオナチが参加していることだ。彼らは、2014年のプーチンによるクリミア侵攻の後、ウクライナ東部でモスクワの支援を受けた分離主義者と、最も激しい市街戦の一部を戦い抜いて実戦で鍛え上げられている。その一つがアゾフ大隊で、ウクライナの国家的目的はこの国からユダヤ人やその他の劣等人種を一掃することだと主張した、公然たる白人至上主義者によって創設された。2018年、米国議会は、ウクライナへの支援を「アゾフ大隊に武器、訓練、その他の支援を提供する」ために使用してはならないと規定した。それでも、アゾフは現在、ウクライナ国家警備隊の正式な一員となっている。

確かに、この不穏な背景のいずれも、ここ数週間にウクライナ人を襲った苦難を正当化するものではなく、またプーチンが侵攻を開始した際にそのいずれかが動機になったとも考えにくい。実際、プーチンのせいで、オデーサ、ハルキウなど東部の都市に住むユダヤ人は極度の圧力にさらされている。多くは地元のシナゴグやユダヤ人コミュニティセンターに避難している一方で、イスラエルを含む外国へ逃れた人々もいる。イスラエルはすべてのユダヤ人にウクライナから退避するよう促している。

私自身の祖父母も迫害から逃れるためにウクライナ西部から逃れなければならなかった。こうした負の連鎖が続いているのを見るのは悲劇だ。もし国が混乱と反乱の状態に陥れば、ユダヤ人は一部の同国人から再び危険にさらされかねない。この脅威を認めないということは、それに備えるための対策がほとんど講じられていないことを意味する。

たとえその国の一部が、歴史上最も忌まわしい運動のひとつと関わってきたとしても、この局面でウクライナの側に立つことは、疑いなく名誉ある姿勢だ。いま、プーチンが焦土化の執念でウクライナの人々への攻撃を日々エスカレートさせるなかで、本当にNワードに値するのが誰なのかを見ないでいるのは難しい。

アレン・リップ、2022年3月5日 — 出典

次回の記事でこの研究を続けます。

「過去を忘れる者は、それを繰り返す運命にある。」 George Santayana.

神が預言史において過去に成就すべきものとして定められたことはすべて、すでに成就した。さらに、なお順序に従ってこれから起こるべきことも、ことごとく成就するであろう。神の預言者ダニエルはその持ち場に立っている。ヨハネもその持ち場に立っている。黙示録において、ユダの部族の獅子は、預言を学ぶ者たちにダニエル書を開いた。こうしてダニエルはその持ち場に立っているのである。彼は、私たちがその成就のまさに目前に立っているときに知っておかねばならない、重大にして厳粛な出来事について、主が幻のうちに彼に啓示されたことを証言している。

歴史と預言において、神の御言葉は真理と誤りの間に長く続いてきた闘争を描いている。その闘争はいまなお進行中である。これまでにあった事柄は繰り返される。古い論争は再燃し、新しい理論は絶えず生じてくる。しかし、第一、第二、第三の天使のメッセージの宣布にあたり、預言を信じ、その成就に参加してきた神の民は、自分たちの立場を知っている。彼らは精金にもまさる尊い経験を持っている。彼らは、初めの確信を終わりまで堅く保ち、岩のように堅く立つべきである。『Selected Messages』第2巻、109ページ。